

20世紀の壮大な実験の片隅  
で



小城ゆり子

## 20世紀の壮大な実験の片隅で

二一世紀になって、世界が変わった。フランスで暴動がおき、イギリスで暴動がおき、アラブ世界で民主化の嵐が吹き、アメリカその他で貧しい人々がデモをして、昔なら社会主義政権の樹立となるところだが、世界はもう社会主義へは向わない。ソ連崩壊以後、確実に何かが変わったのだ。

二〇世紀は、社会主義の実験の時代だった。一九一七年のロシア革命以後、第二次世界大戦をへて、多くの社会主義国が誕生したが、自由は来なかった。

私の父は、マルクス主義者だった。戦時中、弾圧されるのが怖くて、戦争に反対できず、戦後は組合運動などして、赤狩りにもあった。生粋のマルクス主義者だった父は、幼い私に社会主義の理想を吹き込んだ。ソ連は理想の国、ロシア語を学ぶときっといいことがある、と教えた。その言葉通り、ロシア語を学んだ私だが、それでいいことは何もなかった。

私の中学時代の社会科の教師は、シベリヤに抑留されていた体験を持ち、反共思想家だった。ソ連は自由のない恐ろしい国だ、と彼は言った。労働者が自分たちばかり良い物を食べ、良い着物を身につけるのは間違っている、と言った。中学生の私は、この先生は教師として役場から報酬をもらって生活しているのに、自分は労働者ではないと思っているのだろうか、と批判的に見ていた。考えとしては、父親の影響の方が強かった。が、この教師の言ったことは、ひどく印象に残っている。

ずっと後になって、ソ連には自由がないではないか、と言った私に、父は、ソ連にもやがて自由が来る、と言った。待っていれば、社会主義社会が成熟して、自由も来る、と多くの進歩的知識人が考えていた。ハンガリーの動乱、チェコの革命……自由は来ただろうか？

いや、ゴルバチョフがソ連に自由を呼び込んで、結果、ソ連は崩壊した。東欧からも社会主義は姿を消した。マルクス主義は科学ではなかった、単なる夢に過ぎなかった、と証明される。

二〇世紀の壮大な実験。社会主義社会の建設。それは多くの血を流した。革命で流された血の多さは、筆舌に余りある。その実験の片隅で、私は生きてきた。

一九四三年に生まれ、戦後、冷たい戦争の中で育ち、政治運動に身を投じた。核実験反対運動、ベトナム反戦運動、そして社会主義社会を作ろうという左翼運動。ソ連や中国とは違う、真の社会主義を実現しよう、日本共産党に反対し、スターリニズムを打倒しよう、という新左翼の運動だった。

その新左翼の中で、私はスターリニズム（左翼官僚主義）は、この組織自体の中にもあると知ってしまう。それだけでなく、血で血を洗う内ゲバにもあう。私が殺人者にもならず、殺されもしなかったのは、ひとえに女だったからである。殺すことを要求もされなかった。

今となっては、私も遊んでいたのではないかと思える。理想に向って突き進んで、青春を謳歌していたのではないか。その果てにあった殺し合いは悲惨だった。

そして、歴史は、マルクス主義が夢に過ぎなかったことを立証した。二〇世紀の壮大な実験は終わりを告げ、世界はこれからどう動いていくのか、全く不透明になってしまった。

願わくば、これまでに流された血が、無駄にならないよう、やがて真の意味で自由な社会が来るよう、祈るばかりである。

